

モーツァルト巡礼ーその 15

K. 518 水谷康男

K429 から K441 までは、声楽曲が続きます。

K429 は、ボーイソプラノ・男声合唱とオーケストラのためのカンタータ「天地の精」です。ケッヘル初版では 1783 年の作品とされていましたが、現在では 1785 年にウィーンで、作曲されたものとして、ケッヘル 6 版では K468a となりました。フリーメイソンのための作品であることと、モーツァルトがフリーメイソンに入会したのが 1784 年 12 月 14 日であるので、1784 年以前の作という事はありません。

この作品は、完全形に仕上がったものではなく、合唱とアリアだけは完全で、管弦楽はスケッチと肝心な部分の指定はあるので、これをもとにシュタットラーが補足して総譜とピアノ伴奏版を作り、この二つの版が現在も使用されています。Fl1、Ob2、Fg1、Hr2、Vn2 部、Va2 部、男性 3 部合唱、(ボーイ)ソプラノ独唱という構成で、祝祭的な堂々とした内容で、演奏時間 13 分の作品です。

K430 は、未完成のオペラ「だまされた花婿」です。1783 年にザルツブルクに行った際に、K422 の未完のオペラブッフ「カイロの鷲鳥」とほとんど同時、あるいは相前後して、作曲を始め、一部はウィーンに帰ってから作曲を続けた見られています。リブレットは、ロレンツォ・ダ・ポンテのもので、全 2 幕の予定で、序曲は、完全な形で、アリアなど 4 曲のスケッチまではすすんでおり、主な配役の予定表まで作られていました。しかし、自発的に書き始められたものの、注文主は現れず、未完成のままに終わっており、この CD 全集でも収録されていません。

K431 は、レシタティーフ「あわれ、お、夢か、うつつか」とアリア「あたりに吹くそよ風よ」です。1783 年 12 月にウィーンで、作曲され、同月に歌われたものとされています。Fl・Fg・Hr 各 2 本と Vn2 部、Va2 部 Vc・Cb のオーケストラに乗って、テノール独唱で、レシタティーフのあとにアンダンテ・ソステヌートのアリアに続く、9 分の曲です。

K432 も、レシタティーフ「あなたはかくも裏切った」とアリア「激しい後悔が」で、1783 年にウィーンで、作曲され、前曲と同じ編成の Fl・Fg・Hr 各 2 本と Vn2 部、Va2 部 Vc・Cb のオーケストラに乗って、バス独唱で歌われる、4 分程の曲です。

K433 は、バスのためのアリア「男はたえず慰みの機をねらい」で、「後宮のからの逃走」のあとに計画されたドイツ語オペラ「二人の主人に仕える召使」の挿入曲として考えられていましたが、書きかけで中止となり、現在ではケッヘル目録から除外されており、ソロパートと低音が書かれているものの、ヴァイオリン部はメモ程度にしか



1781年のグラーベンの様子。C・シュッツの色彩版画。ウィーンに定住したモーツァルトは1781年8月の末、ウェーバー一家の下宿を出てこの街區の新居に移った。



現在のグラーベン

書かれていません。補作した編曲もありますが、この CD 全集では収録されていません。

K434 は、男性三重唱「大アマゾン王国から」ですが、1785 年ころに手が付けられたまま未完成のままで、これも、この CD 全集では収録されていません。

K435 は、テノールのためのアリア「私がもし無数の竜に」ですが、K433 と同じく、「後宮のからの逃走」のあとに計画されたドイツ語オペラ「二人の主人に仕える召使」の挿入曲として考えられていましたが、書きかけで中止となり、現在ではケッヘル目録から除外されており、この CD 全集では収録されていません。

続く K436,437,438,439, 346 (439a) と、5 つのノットゥールノ(夜曲)が続きます。5 曲目の K346 は、1 年前のモーツァルト巡礼-その 12 でも、既述しておりますが、この 5 曲はいずれも1783年ウィーンで、作曲されたものと考えられています。3 本の木管楽器に伴奏される声楽曲で、いずれも演奏時間数分の小品です。

K436 は、三重唱ノットゥールノ「さて、悲しい時がやってきた」で、バセット Hr3 本の伴奏で、ソプラノ 2 人、バス 1 人で、歌われます。

K437 は、三重唱ノットゥールノ「何も言わずに嘆こう」で、クラリネット 2 本・バセット Hr1 本の伴奏で、ソプラノ 2 人、バス 1 人で、歌われます。

K438 も、三重唱ノットゥールノ「いとしいお前と離れていれば」で、クラリネット 2 本・バセット Hr1 本の伴奏で、ソプラノ 2 人、バス 1 人で、歌われます。

K439 は、三重唱ノットゥールノ「二つのかわいい目が」で、バセット Hr3 本の伴奏で、ソプラノ 2 人、バス 1 人で、歌われます。

K346 は、三重唱ノットゥールノ「いとしのひとみ、うるわしの目」で、バセット Hr3 本の伴奏で、ソプラノ 2 人、バス 1 人で、歌われます。

K440 は、未完のソプラノのアリア「私の希望はあなたに、花嫁よ」で、1782 年にウィーンで作曲されたと思われませんが、未完成のため現在では全集にも収録されていません。

K441 は、3 重唱「ねえ、あなた、リボンはどこ？」は、モーツァルト自作の歌詞に作曲した即興的な冗談音楽の 1 種で、コンスタンチェ(Sp)と、モーツァルト(T)と、友人ジャカン(Bs)がふざけ合いながら掛け合って歌う、演奏時間数分の軽い作品です。

K442 は、ピアノ三重奏曲 ニ短調で、ピアノ、ヴァイオリン、チェロの編成で、1783 年ウィーンで作曲されたものとみなされています。全 3 楽章のどの楽章も未完成のままで、シュタットラーが補足して、モーツァルトの死後 K442 として収録されました。Ⅰ:アレグロ、Ⅱ:テンポ・ディ・メヌエット、Ⅲ:アレグレットの 3 楽章よりなり、演奏時間は 22 分です。モーツァルトが完成させたわけではないためか、この CD 全集には収録されていませんが、YouTubeで、ウィリー・ボスコフスキーVn、ニコラウス・ヒューブナーVc、リリー・クラウスPfによる名演奏を聴くことができます。

K443 は、フーガ(トリオ・ソナタ) ト長調(未完成)です。1782 年にウィーンで、37 小節だけはモーツァルトが書

いたものに、シュタットラーが95小節を追加した、122小節に完結させたもので、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの弦楽トリオによる数分の曲です。これもモーツァルトが完成させたわけではないためか、このCD全集には収録されていませんが、YouTubeで、ルーブル宮音楽隊メンバーによる名録音で聴くことができます。

K444は、交響曲第37番の序奏です。1783年に交響曲第36番「リンツ」の演奏会に際し、一緒にミハエル・ハイドンの3楽章の交響曲ト長調を、アダージョの序奏を書き加えて演奏したが、そのすべてをモーツァルトの作品として第37番の交響曲となり、旧全集で採用されたものの、その後、アダージョ以外は、モーツァルトの作品目録から除外されたのです。

K445は、行進曲ニ長調です。1779年にザルツブルクで作曲されたのですが、ケッヘル初版では、1783年のものとして、このケッヘル番号となりました。(現在ではK320c) ディヴェルティメントニ長調K334あるいは、ノットウールノニ長調K286の開始曲として、また終曲と考えられています。ホルン2本と弦4部の編成で、3分あまりの演奏時間の小曲です。

K446は、パントマイムのための音楽(未完成)で、1783年2月に弦楽のために書かれた曲ですが未完成のまましかも演奏できる状態では残っていないため、演奏される機会もなく、このCD全集でも、録音されたいません。

K447は、ホルン協奏曲第3番変ホ長調で、1783年にライトゲープのために書かれてものと思われていますが、この作品に限っては、ライトゲープの名も、作曲年月日も書かれておりません。オーケストラの編成は弦4部(Vn2部、Va、Vc・Cb)とCl・Fg各2本で、Ⅰ:アレグロ、Ⅱ:ロマンチェ・ラルゲット、Ⅲ:アレグロの3楽章よりなり、演奏時間15分の軽快で気持ち良い旋律に溢れた傑作です。

K448は、2台4手のピアノのためのソナタニ長調です。この曲の草稿の欄外に赤インキで1784と書かれているため、1784年の作と思われたいましたが、父親への手紙などから1781年11月の作品と考えられており、新版ではK375aとなっています。モーツァルトにとっては唯一の、2台4手のソナタです。2台ピアノの作品の中でも知名度も高く、実際に2台が全く対等な立場でコンチェルタナな効果を上げ、協奏曲のような構えを持っています。※Ⅰ:アレグロ・コン・スピリット、Ⅱ:アンダンテ、Ⅲ:モルト・アレグロよりなり、演奏時間25分前後の作品です。

※たまたま、数日前(2024.8.25)に、ザハール・ブロンと服部百音の2つのヴァイオリン、イリーナ・ヴィングラードのピアノによる「コンチェルタンテ」(フェルディナント・ダヴィット編曲)としてこの曲の編曲版が演奏されたように、協奏曲的に華やかに演奏されるほど知られた曲です。



モーツァルト:コンチェルタンテ
(原曲:2台のピアノのためのソナタ ニ長調 K.448) ●
フェルディナント・ダヴィット編曲
ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791)が完成させた唯一の2台のピアノのためのソナタは、1781年の11月ごろ、弟のヨーゼフ・パウル・アウエルマン・ハンマーとの共謀のために作曲されたと考えられている。このソナタは2台のピアノのためのもっともよく知られる作品のひとつで、この編成の古典と言えよう。
ソナタは急転急下の3つの楽章からなり、行進曲風に堂々と開始される第1楽章と、2台のピアノが優雅な対話を交わす第2楽章に、(トルコ行進曲)を思い起こさせるロンド主題による変化に富んだ第3楽章が続く。本日演奏されるのは、19世紀前半にライプティヒ・ザヴァントハウス管弦楽団のコンサートマスターとして活躍した名手、フェルディナント・ダヴィットが、ふたつのヴァイオリンのために編曲したものである。

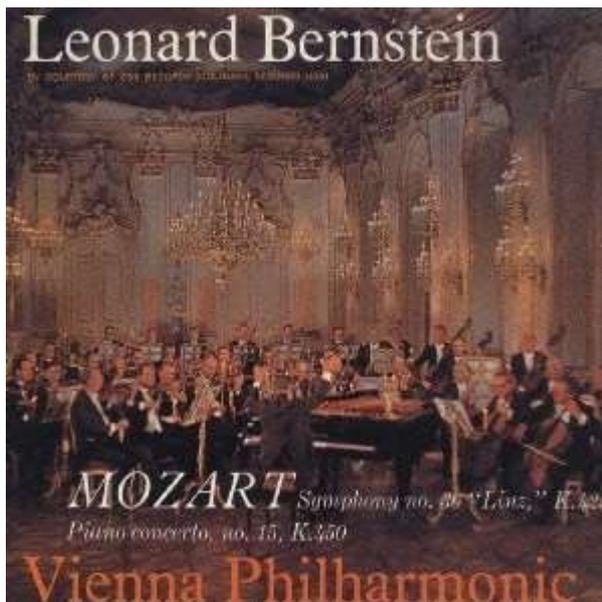
K449からK451までの3曲は、ピアノ協奏曲(第14番から第16番)が続きます。いずれも、1784年2月から3月にかけてウィーンで作曲されました。

K449は、ピアノ協奏曲 第14番 変ホ長調 です。弟子のピアニストである、バーバラ・フォン・プロイヤーのために作曲されました。弦4部(Vn2部、Va、Vc・Cb)とOb・Hr各2本(管楽器は任意で、弦楽だけでも演奏できる)の編成で、Ⅰ:アレグロ・ヴィヴァーチェ、Ⅱ:アンダンティーノ、Ⅲ:アレグロ・マ・ノン・トロポ の3楽章よりなり、室内乐的な天衣無縫な部分も見られる、演奏時間20分余りの軽快な作品です。

K450は、ピアノ協奏曲 第15番 変ロ長調 です。このK450と続くK451、K453の3曲は一連の姉妹作品で、K449が弟子のバーバラ・フォン・プロイヤーのために作曲されたに対し、これら3曲はモーツァルト自身のペースに合わせて1784年春に書かれたものとみなされています。(父への手紙に「ぼくはこの二つの協奏曲

K450/K451に優劣をつけることはできません。どっちも汗をかかせる協奏曲だと思います。しかしより難しいのは、ニ長調より、変ロ長調の方だと思います。いずれにせよ、この変ロ、ニ、トの三つの協奏曲のうちで、父上と姉上にはどれが一番気に入るか知りたいものです。変ホ長調(K449)は別です」とあって、この曲以降の3つの協奏曲には独奏部に技巧的な部分が多く、人に弾かせるよりも、モーツァルト自身のピアニストとしての技量示すためのものだったようです。)

弦4部(Vn2部、Va、Vc・Cb)とFl1本、Ob・Fg・Hr各2本の編成で、Ⅰ:アレグロ、Ⅱ:アンダンテ、Ⅲ:アレグロの3楽章よりなる演奏時間25分程の、珠玉の作品とされています。



私の愛聴盤 バーンスタイン、ウィーンフィルハーモニー

K451は、ピアノ協奏曲 第16番 ニ長調 です。弦4部(Vn2部、Va、Vc・Cb)とFl1本、Ob・Fg・Hr・Tp各2本、ティンパニの編成で、Ⅰ:アレグロ・アッサイ、Ⅱ:アンダンテ、Ⅲ:アレグロ・ツディ・モルトの3楽章よりなる演奏時間23分程の交響的な作品です。

K452は、ピアノ五重奏曲 変ホ長調 です。弦楽四重奏とピアノという編成ではなく、Ob・Cl・Hr・Fgという木管楽器とピアノによる五重奏曲です。1784年3月末にウィーンで完成し、翌4月1日に宮廷劇場で初演されました。Ⅰ:ラルゴ〜アレグロ・モデラート、Ⅱ:ラルゲット、Ⅲ:ロンド・アレグレットの3楽章よりなるモーツァルト唯一のピアノ五重奏であり、これまた大傑作といえましょう。演奏時間は23分程です。

K453は、ピアノ協奏曲 第17番 ト長調 です。弦4部(Vn2部、Va、Vc・Cb)とFl1本、Ob・Fg・Hr・Tp各2本の編成で、Ⅰ:アレグロ、Ⅱ:アンダンテ、Ⅲ:アンダンテの3楽章よりなり、世間ではあまり取り上げられていませんが、モーツァルト自身も高く評価しているように、きめ細かく入念に作られています。演奏時間も30分位と、少し長めの作品となっています。

以降、次号に続きます。